

令和元年度
座間市福祉推進作文・標語
入選作品集

令和元年度座間市福祉推進作文・標語入選作品集

目次

【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

相模が丘小学校4年 掛川 栞里 「小さな第一歩」1

【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

相模が丘小学校5年 清水 琉夏 「ぼくの妹」3

【中学校の部 最優秀賞】

栗原中学校2年 若林 幸音 「勇気をもった小さな一歩」5

【小学校1・2年生の部 優秀賞】

立野台小学校2年 依田 唯那 「たすけよう」7

中原小学校2年 キーン 瑛美 「わたしの大好きなばあば」8

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

相模が丘小学校3年 奥田 結菜 「ふくしとは」10

座間小学校4年 本多 海璃 「しょうがいでもまっている人のために」
.....12

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

栗原小学校5年 鈴木 千凰 「弟と支援級」14

【中学校の部 優秀賞】

相模中学校1年 松田 みなみ 「SOSのやり取り」16

栗原中学校2年 橋本 百花 「様々な『福祉』の形」19

【小学校1・2年生の部 佳作】

立野台小学校2年 桑久保 佐和子 「車いすのおばあちゃん」22

【小学校3・4年生の部 佳作】

相模野小学校4年 石川 結愛 「わたしの力で」23

相武台東小学校4年 宮崎 哲平 「ぼくのおばあちゃん」25

ひばりが丘小学校4年 荒牧 真歩 「わたしのおじいちゃん」26

立野台小学校4年 大堀 柳 「ぼくの身近な福祉」27

【小学校5・6年生の部 佳作】

相武台東小学校5年 加藤 レイ 「ヘルプマークについて」	29
立野台小学校5年 和田 紗瑛 「自分とのちがい」	31
栗原小学校6年 堀 真一朗 「けがの間で学んだこと」	33
相武台東小学校6年 河治 美和 「今、わたしができること」	35
立野台小学校6年 宮澤 慶太 「クッキー」	37

【中学校の部 佳作】

相模中学校1年 古木 杏美 「笑顔で幸せに」	39
東中学校2年 空田 羽音 「生きやすい環境を」	42
東中学校2年 山崎 結芽 「心に寄りそって」	44
南中学校2年 宮松 菜南 「平等の大切さ」	46

【標語の部 最優秀賞】

相模が丘在住 加藤 茂子	48
--------------------	----

【標語の部 優秀賞】

南中学校1年 石川 蓮	48
相模が丘在住 川原 千代子	48

【標語の部 佳作】

座間小学校3年 白崎 瑛斗	48
相模が丘小学校6年 酒井 梨衣奈	48
南中学校1年 矢野 愛実	48
立野台在住 中村 史子	48

※ 本文中の表記については、原文を尊重しています。

【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

小さな第一歩

相模が丘小学校4年 掛川 栞里

お母さんと電車にのっている時、私は席にすわっていました。そしたら、おとしよりがのってきて、私の前に立ちました。私は、席をゆずる気はなかったのですが、お母さんは

「ゆずりなさい。」

と言ったので、しかたない気持ちでおとしよりに席をゆずりました。おとしよりは

「ありがとうね、えらいね」

と、一言いい、うれしそうな顔で席にすわりました。私は少しだけ、うれしくなりました。

駅についた時、私とお母さんは電車からおりようとした時でした。おとしよりは

「本当にありがとうね。」

と、声をかけてきました。私はその一言で、心がとてもあたたかくなり、とっても、うれしい気持ちになりました。席をゆずりたくなかった自分が、はずかしい気持ちで、いっぱいになりました。

私はその時からずっと、その気持ちをわすれずに、おぼえています。

私は今でも、電車にのるときは、足の悪い人はいないか、体の悪い人はいないか、などまわりをさがしています。まだ、自分自身からゆずったことはありません。なぜなら、まだ自分から声をかけるゆう気がないからです。電車はゆ

れるので、体の不自由な人やおとしよりは立っていると、とてもあぶないと思います。ころんでケガをしたら、大変です。なので私は、これからゆう気を出して、声をかけようと、思いました。私はおばあちゃんと、いっしょに生活しています。今は元気ですが、ゆっくり歩きます。大好きなおばあちゃんには、いつまでも元気でいてほしいです。なので、体の不自由な人や、おとしよりが、すみやすいかんきょうになってほしいと思っています。電車で席をゆずることは、あたり前で小さなことかもしれないけれど、その小さなつみかさねが、すみやすいかんきょうをつくる第一歩だと思いました。

【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

ぼくの妹

相模が丘小学校5年 清水 琉夏

ぼくの妹は、しょうがいがあります。何のしょうがいかと言うと、発達しょうがいというしょうがいです。どんなしょうがいかと言うと成長におくれがでるしょうがいです。見ためは、みんなと変わりはありません。ぼくの妹はしょうじょうは軽い方です。でも、ぼくからしてみれば少し重い方だと思います。理由は、2才もおくれがあるからです。今、妹の年は4才です。そして2才のおくれがでているということは、今、妹の脳内は2才ということになります。

発達しょうがいだからと言ってダメなことだけではありません。発達しょうがいがあっても、できることもあります。でもそのできないことを家族全員で教えていくと、覚えていきます。がんばって教えれば教えるほど、できた時はすごくうれしいです。できないことができるようになると、妹もうれしいと思います。理由は、できないことができるようになりほめられるとものすごく笑顔になるからです。ぼくはその笑顔を見ると、教えて良かったな、がんばって教えたかいがあったなと思うようになりました。

それに、一番妹と関わっているお母さんを見ていると、しっかり話せない妹にたくさんしゃべりかけているのかが気になって聞いてみると、

「言葉と言葉の意味が分かってほしいから」と言っていました。例えば、指をさして話すと、「これは〇〇なんだな。」と分かるから、しゃべりかけているんだそうです。

そして今、妹はそのおかげで色々わかるようになってきました。家族の名前が分かったり、ありがとうをどのタイミングで言うか分かたり、のどがかわいた時に「お茶」と言えたりと色々できます。でも、ふつうの人から見ると、「そんなのふつうじゃん。」と思うかも知れません。家族の一員として、とてもうれしいことなのです。

最後にぼくが伝えたいことは、しょうがいがあるからといってできないことだけではなくて、出来ることも、出来るようになることもたくさんあるということ、しょうがいがあっても一人の個性として見てほしいことです。例えば、学校で足が速い人もおそい人も一人の個性として見るのが大切です。走るのがとく意ではない人も、それがとく意でない分、他のことでとく意なことがあると思います。一人一人が幸せにくらせるような広い心を持つことが大切だと思いました。

【中学校の部 最優秀賞】

勇気をもった小さな一歩

栗原中学校2年 若林 幸音

住み良い国のために今私ができることは・・・

登校中に白杖を持った男性と毎日すれ違う。

ガードレールを杖で「カーンカーン」とたたいて確認して進み、無い所は「通ります。」と声を出して通る。ある日、道を斜めに車道に向かって歩いていた。はじめは声をかけるのをためらって見守っていたが、どんどん逸れていく危ない様子に勇気を出してそばまで駆け寄った。そして両方に手を添えて、「ちょっと道路の方に進んでいるので左に行きます。」と一緒に歩道に戻った。とてもドキドキしたし、正直どう思われるかなと不安に思ったけれど、男性の「ああ、ありがとう！」という言葉聞いて私までホッと安心して嬉しくなった。

翌日、私がもし目が見えなくて杖だけで歩いていたらと想定しながら通学路をたどってみた。すると、なんと危険な箇所が多いことか、驚き、障害を持っている方にとって万全ではないことに気づかされた。

一方で、祖父と祖母は近年、杖をつき始めた。数年前までは一緒に登山をしたり、公園で散歩を楽しんでいたのが段々と不自由になる姿にそばにいて、心が痛かった。もちろん本人たちはもっと辛いはずだ。なのに懸命にこれ以上ひどくならないように、と日々ウォーキングに励んでいる。「この駅にはエレベーターがないから。」「道路がボコボコして怖いのよ。」と断られることもある。ここでも想像

力を働かせる。もし、もっと階段が整備されていたら、道が歩きやすかったら・・・きっと行動範囲も広がるだろう。

日本は先進国といわれ、来年はオリンピックも開催される。でも、肝心なみんなが住みやすい国には少し鈍感な気がする。

高齢化がすすみ、いずれ私たちのいく道にも必ず体が衰え当たり前に出来ていたことが難しくなる壁が待ち構えている。まず体に障害を持っていらっしゃる方そして不自由になっていく体でも、安心安全な整備が求められている。

そのために、今、私にできること。政治家のように、具体的に予算を組み、工事をすすめることはできないが、声をあげること、そして不自由な立場の人の気持ちになって考えることはできる。自分には縁遠いと思っていた福祉だが、実は「相手の立場に立って思いを馳せてもっとより良く出来る方法を模索していくこと」が大事なのではないかな。そう気付かされた。

これからのために勇気を出していこう。小さな一歩が大きな変化につながることを信じて。

【小学校1・2年生の部 優秀賞】

たすけよう

立野台小学校2年 依田 唯那

わたしには、二人のおじいちゃんがあります。そのうち、一人のじいじが、頭のびょう気です。

頭のびょう気のじいじをくらしやすくしたいと思ったので、お父さん、お母さん、ばあば、わたしで、どうしたらいいか考えました。そして思いついたのが、家の中のかべに、てすりをつけたり、テレビを見るとき、いすが遠かったので、ちかくにししたり、トイレのまわりにてすりをつけ、すわりやすくしたり、立ちやすくしてみました。今は、家にいますが、何日か、たつと、また、びょういんにいって、にゅういんをして、何日かたてば、家にもどってきます。なので、そのときは、「大じょうぶ？」と声をかけていきたいと思っています。

だから、これからわたしは、じいじの手だすけや、こまっているときにてつだってあげたいなあと、思いました。なので、わたしは、「大じょうぶ？」と声をかけていき、くらしやすく何かをかえてみて、じいじがくらしやすく生活をおくってほしいと、思いました。

【小学校1・2年生の部 優秀賞】

わたしの大好きなばあば

中原小学校2年 キーン 瑛美

わたしはおばあちゃんのことが大好きでした。おばあちゃんは、車のうんてんができないので、いつもとおいのあるきできてくれていました。

ある日、おばあちゃんが、びょうきになってにゅういんしてしまいました。がんでした。すごくかなしかったです。そのつぎの日、おばあちゃんは手じゅつしてしまいました。ぜんぜん目をさまさなくてかなしかったです。おばあちゃんは二しゅうかんくらいにゅういんしました。おみまいにもなんかいか、いきました。やっと、おばあちゃんがたいいんしました。うれしかったです。一か月いじょうわたしのいえにとまってくれました。おばあちゃんはいつものようにやさしくしてくれました。おばあちゃんのしごとはビールはこびなのであまりおりしないでと、わたしはいいました。なので一か月お休みしました。おじいちゃんはよるおそくまではたらいていたのであまりおばあちゃんのおせわができませんでした。やっと3月からおしごとをはじめること、おばあちゃんは、きめました。こうがんざいちりょうというのをやったので、かみのけがぬけてしまったので、かつらをかいました。それでいまは、なるべく早くかえられるように、かつらをかぶってがんばってしごとをしています。わたしのたんじょう日かいにもきてくれてうれしかったです。たんじょうびのおもちゃもかってくれました。これからは、もっともっとなかよくしたいし、かみの

けのことは気にしないで元気でくらしてほしいし、こまっていることがあったらすぐに手つだいたいとおもいます。

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

ふくしとは

相模が丘小学校3年 奥田 結菜

この前、図書時間に「アンドリューの一日」という本を先生が読んでくれました。わたしは、今までもうどう犬について知りませんでした。もうどう犬は、目がふ自由な人をたすける犬です。

アンドリューは目がふ自由な人のために、階だんを下りる時に止まって教えてあげたり、ドアをあける時はアンドリューがはなをのばして知らせあげたり、バスなどののり物にのっている時、しずかにじっとしてまっていたりします。お昼ごはんの時、ごしゅ人が食べていても、アンドリューはごはんを食べないし、トイレも行かないでまっています。アンドリューは本当はおなかへって食べたいけれどがまんしているかもしれないと思い、えらいな、と思いました。

この前、川にバーベキューに行った時、本物のもうどう犬を見かけました。アンドリューではなく、べつのもうどう犬だったけれど、アンドリューのお話を聞いていたので、このもうどう犬も同じようにすごいことができるのかな、と思いました。

わたしは、目が見えないのがどういうことかわからなかったのですが、おうちの中を目をつおって歩きまわってみました。そうしたら、ぶつかりそうでした。妹が「こっちだよ。」と声で教えてくれました。でも犬だとしゃべれないので体とかで教えてくれることがわかりました。

わたしが目をつむって何も見えなかった時、妹の声が聞こえて安心しました。もうどう犬も妹と同じで安心させてくれる犬なんだなぁと思いました。

わたしもこまっている人がいたらたすけてあげられるやさしい人になりたいです。

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

しょうがいでもまっている人のために

座間小学校4年 本多 海璃

わたしの家の前には、つえがないと歩くことができないおじさんが住んでいます。

そのおじさんとは仲が良くて、毎日のように会って話をしています。

ある日、そのおじさんがいつものようにつえをついて歩いていました。わたしは、どうしていつもつえをついていいのかふしぎになったので理由を聞いてみると、

「つえがないと歩けないんだ。そういうしょうがいなんだ。」と、話してくれました。

数日後、今度は下校中に会いました。おじさんは、大きくて重たいふくろを持っていたので、早くふくろを持ってあげたいなと思いました。しかし、その時信号が赤だったのですぐに行くことができませんでした。なので、わたしは大きな声で、

「おじさーん。海璃だよ。」

と声をかけました。でも気づいてもらえなかったなので、何回もよびました。やっと気がついてくれたみたいなので、そこでまっててと言いまっててもらいました。

やっと信号が青になると、わたしは急いでおじさんのもとに行きました。そして、

「ごめんね。おそくなっちゃって。このふくろ重たくないの？わたしが持ってあげようか。」

と聞くと、

「重たいよ。でも持ってもらえるんだったら持ってもらおうかな。じゃあこれをうちの家まで持ってきてね。よろしく、またあとで。」

と言うと、おじさんはつかれたような顔をして、家へ帰っていきました。

その後、わたしはその大きな重たいふくろを持って急いで帰り、おじさんの家へ届けました。わたしは、その時に、「持ってあげてよかったな。おじさんじゃなくても、こまっている人がいたら、手助けしてあげよう。」と思いました。

このように、つえがないと歩けない、目が見えない、耳が聞こえない、話せない、などというしょうがいを持つ人や、こまっている人がわたしたちのまわりにはたくさんいます。

もしそのような人を見つけたら、やさしく声をかけてあげてください。なぜ、やさしく言うのかというと、強く言ってしまうと、相手をきずつけてしまうかもしれないからです。

それが、みなさんへのお願いです。

最後にわたしが考えたことは、お年寄りの人や、しょうがいを持っている人、こまっている人には、勇気を出して、やさしく、相手によく伝わるように言おうということです。

わたしはしょうらい、小学生のお手本になる大人になりたいです。わたしが、しょうがいを持つ人やこまっている人を助ける姿を見て、「ぼくもまねしたいな。あんな大人になりたいな。」と、子どもたちに思ってもらいたいです。そんな大人になれるよう、わたしは今から、たくさんの方の役に立つことをたくさんしていきたいです。

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

弟と支援級

栗原小学校5年 鈴木 千凰

私には、支援級に在せきする弟がいます。でも、

「弟は支援級。」

と言うと、一部の人から、

「お前の弟、バカなんだ。」

と言われたり、何か小さい声でヒソヒソ話されたりすることがあります。私は、支援級に通う弟をはずかしいと思ったことはありません。今年から、一緒に学校に通えてとてもうれしいです。

弟は、発達におくれがあり、弟と同年代の子ができることも苦手とすることがあります。同年代の子は、自分の名前を書いたり字を書いたりするけど、弟は、まだ字を書くことができません。字を書く時は一緒に手をそえてあげて、字をなぞれるようにしてあげます。

「上手に書けたね。」

と言うと、弟はにこにここと笑います。とてもがんばりやです。

弟の苦手とすることをせめるのではなく、手伝ってあげたり助けたりしてあげればいいと思います。支援級の授業でも、できたね、がんばったねを大切にしてくれています。だから、「支援級」と言うだけで、悪く言わないでほしいです。私にとって一番つらいのは、弟に発達のおくれがあることではなく、「支援級」と言うだけで悪く言われることです。弟のような発達におくれがある子が困っているこ

と、苦手としていることに気づき、手伝ってあげられるような社会になってほしいです。

「福祉」という言葉の意味は、全ての人が幸せに生きることを願い、支援することだそうです。障がいがある子を差別するのではなく、障がいの事を少しでも知ってもらい、その考えやイメージを変えてもらいたいです。

いつか、すべての人たちが心のかべをのりこえて一つになれたらいいなと思います。それが今の私の願いです。

【中学校の部 優秀賞】

S O S のやり取り

相模中学校 1年 松田 みなみ

この世界には福祉と関係しているものが沢山あると思います。例えば110番の家です。不審者がいたり、災害が起きたり、緊急時の場合に逃げ込め不幸なことを防げます。私も登下校中に見知らぬ人に声をかけられたら110番の家に行く決めてしています。もう一つは優先席です。高齢者や障害者、妊婦の方が席にすわることが優先されるのも幸せになるでしょう。このように様々なものが福祉へつながっているのです。

私は最近、新しい福祉へ出会いました。ヘルプマークです。ニュースにも出ていて、お姉さんが、

「ヘルプマークってしってる？」

と聞いてきました。実際ヘルプマークが出てきているのは知っていたけれど、どのような働きをするのかは知りませんでした。なので疑問に思いどんなものなのか聞き返しました。それは見た目では分からない病気やけがをもっている人のための目印でした。私は作った人がすごいと思いました。車いすの方や松葉づえを持っている人だと周りからも助けを受けられることは多いと思います。私も友達が骨折をして包帯を巻いていたら声をかけることもできたし、代わりに荷物を持ってあげたりできました。けれど、私が助けられたのは外側から分かるS O Sです。内側の病気やなやみを知り、助けることができたのは外側のS O Sよりも確実に少ないです。だからヘルプマークがでてきたこと

によって私も、大丈夫ですか、お手伝いしましょうかなど、声をかけられる回数が増え、幸せへつなげていけると思います。

では、使う人はどのような気持ちになるのか考えてみます。もし、私が外からでは分からないけがや病気をしてしまったらヘルプマークを進んでつけようとは思わないかもしれません。なぜなら普段の生活でも私は強がってしまうからです。友だちと遊んでいる時にけがをしてしまったら、とても痛くて泣きそうになっても（周りに迷惑はかけたらだめ）と思い必死でがまんします。それにもし泣いたとしても大丈夫だと言います。あとは、少しおなかが痛くなったりしても頭が痛くなっても周りには伝えないで一人でたえます。あまりよくないですが、私以外の人も一度は経験した事はあると思います。一人ひとりの性格は違います。すぐに助けを求められる人、助けることができる人、周りをよく見れる人など性格の違いがある上でヘルプマークや他の福祉と上手に付き合っていく事が大切だと思いました。

私はまだヘルプマークをもったことはないですが、実際マタニティマークといって妊娠した方がつけるものを母ももらったそうです。母も私と同じ考えでつけなかったと言います。具体的に、電車やバスの席をゆずってほしいと主張しているみたいで、なかなかつけようと思えなかったからだそうです。

けれど、何か不自由がある人に母のような遠慮はしてほしくないし、気楽に助けを求められない世界にはならないでほしいです。そのためには、私たちが困っている人やSOSがでている人の気持ちになってみるのが大切だと思います。相手の気持ちを考えるのではなく、なってみるので

す。考えるだとその人の事をあくまでも外側から、他人として見ていることになってしまうと思ったからです。なってみると自分に置き換えることができるのでより相手の事が分かり、どんな行動をとることが適切なのかが考えられます。

しかし、なってみるのはとても難しいです。当然他の人の気持ちは分かりません。けれど予想するのはできるので予想の訓練が必要です。予想の訓練などあるのかと思う人もいるでしょう。それは私たち中学生と小学生が行っている道徳のことです。道徳は色々な視点から人の気持ちを考える授業です。その授業を他人事として捉えるのではなく、自分だったらどうするかや、私だったらこんな行動をとろうなどと考えを深めていくことで困っている人の立場になれると思います。

私は、助けてほしいと思っても、それを言葉にすることができません。けれど、みんなが助けるし助けられるという社会にするには、私のように助けられる側になれないという人がいると助け合いの輪は広がらないと思います。SOSを発信することとSOSを受信することが両立できれば誰にとっても暮らしやすくなると私は考えます。なので勇気を出して助けての一言が言えるようにしたいです。

【中学生の部 優秀賞】

様々な「福祉」の形

栗原中学校2年 橋本 百花

みなさんは「福祉」という言葉を聞いて、どのような事を思い浮かべますか。私は、障がいのある方の手助けや、電車やバスで座席を譲る行為ばかりが思い浮かんでいました。でも私は普段から、積極的に他人に話しかけることが苦手なので、もちろん障がいのある方に向かって、「何かお手伝いしましょうか。」などと言えたことは一度もありません。そして、いつしか「福祉」は自分には苦手な分野だと思うようになりました。

しかし、そんな考え方が少しだけ変わるきっかけとなる出来事がありました。

私は吹奏楽部に所属しているのですが、学校の近くの老人ホームに演奏をしに行くことが、毎年の恒例になっています。一年生だった私は、それに初めて参加することになりました。老人ホームには行ったことがなかったので、何となく暗いイメージを持っていました。

演奏までの待ち時間、ホームで過ごしているみなさんが楽しんで聞いてくれるだろうか、間違えずに演奏できるだろうか、という不安がとても大きかったのを覚えています。

私たち金管楽器のアンサンブル演奏の順番が来て舞台上がると、私がそれまで持っていたイメージとは全く違った雰囲気、みなさんの笑顔がありました。

「すごいねえ。」

と言って下さったりして、私たちの演奏を心から楽しんで

くれている様子なのです。

普段の演奏会では、こんなに近くでお客さんの顔を見ることはできないし、家族以外の感想を聞くことはないのです。おじいさんやおばあさんがうれしそうに聞いてくださったのを見て、私もうれしくなりました。楽しい時間を共有することができて、とても良かったです。

次のアンサンブル演奏の発表になり、私たちが控室にしていると、カーテン越しに入浴している利用者の方と介助スタッフの方の会話が聞こえてきました。

介助スタッフの方は、お湯加減などを聞くだけでなく、「今日は中学生が演奏をしてくれているんですよ。」などと、たくさん話しかけていました。それから、利用者の方が何度も同じことを聞いていても、いやな素振りもみせず答えてあげていました。

老人ホームで働くスタッフの方たちは、大きな声でハキハキと、それでいて優しく話していて、利用者の方にとってすごくうれしいことのように思えました。スタッフの方の介助の工夫、細やかな気配りの様子も直に見ることができ、良い体験となりました。

私もまわりの人に気を配って生活するというのを、毎日心がけて行動しています。なので直接的な関わり方でも、困っている人が過ごしやすいように、環境をさり気なく整えてあげる方法なら、私も福祉に貢献できるような気がしました。

「福祉」という言葉を辞書で調べると「しあわせ、幸福」と載っています。今回の演奏会で、おじいさんやおばあさんが少しでも幸せな気持ちになって頂けたとしたなら、私の好きな「音楽」も、福祉の一環なのではないかと思ひ

ます。今年の演奏会も、待っていてくれる利用者の方のことを思い浮かべながら、中学生らしい元気な演奏をしたいです。

みなさんも「福祉」という言葉だけで苦手と思わず、自分に出来ることを探してみてもいいのではないでしょうか。

【小学校 1・2年生の部 佳作】

車いすのおばあちゃん

立野台小学校 2年 桑久保 佐和子

わたしは、車いすのおばあちゃんを見たときに、一人で車いすをおしていました。すこしいへんそうだったので、「一人でおすの大丈夫ですか、なにかやくにたつことないですか。」と言って車いすのおばあちゃんは、「ありがとう」と言ってくれました。それでいえがちかかったのでとちゅうまで車いすをおしていってあげて心や体中がスッキリしました。

【小学校3・4年生の部 佳作】

わたしの力で

相模野小学校4年 石川 結愛

私は、チャレンジタッチという、家で学習をしていて、レッスンにとりくむと、^{どりよく}努力しようポイントというポイントがもらえて、そのポイントは、きめられた中で、好きなものところかんしてもらえます。その、カタログが、とどいたので、見ていたら、^{どりよく}努力しようぼきんというものがあるって、くわしくみていたら、そのぼきんが何につかわれるかというのが、かいてありました。そのぼきんは、学校にかよえない子や、びょうきにかかっているけどお金がなくて、ちりょうができない子のために、つかわれるとかいてありました。実さいにぼ金をした人の感想文をよんでいたら、（こまっている人を、たすけられてうれしかった。今後もみんなをたすけられる行動をしたいです。）とかいてあったので、やってみようかなと思いました。なぜなら、わたしも人のために、できることをやって、あげたいからです。これとは、話がべつかもしれませんが、わたしのうまれる前おじいちゃんが、他かいしました。がんです。わたしは、あったことがないので、あまり、悲しくは、ありませんが、生きていたならば、もっといっしょにいたかった。という気もちがあると思います。きっと、どこかに、おなじ気持ちの人がいると思うからです。だからわたしは、ぼきんをして、びょうきの人には、ちゃんと、ちりょうを受けてもらって、そのぼ金で命を、すくえたらいいなと思ったからです。あと、このぼ金は、ポイントでぼ金をして、

その会社の人たちがお金にかえて、出してくれるから、わたしの家のお金が、なくならなくていいかなと思ったからです。

わたしは、まだ子どもなのに、たくさんの人にたすけられていると思います。なので、わたしにも、できるかぎりのことを、したいと思います。

【小学校3・4年生の部 佳作】

ぼくのおばあちゃん

相武台東小学校4年 宮崎 哲平

ぼくが一年生のときに、千葉県に住んでいるおばあちゃんが、かたをいためて手じゅつをしました。その時、初めてつらい思いをしているおばあちゃんを見ました。

さい初、ぼくは何をしてあげればいいのか分からなくて、見ているだけでした。でも、見ているうちに、おばあちゃんが何をしてほしいのかがわかってきて、重い物を持ってあげたり、食べ物を運んであげたりしました。その時に、おばあちゃんがぼくに

「助かるよ、ありがとう。」と言われたことがうれしくて、その言葉が今でも心に残っています。

おばあちゃんがかたをいためる前までは、ぼくやお姉ちゃんといっしょにバトミントンや、ボール投げをして遊んでくれました。これからは、今のおばあちゃんができる遊びを考えて、よろこんでもらいたいです。

今回のけい験で、こまっている人を助けてあげたい気持ちと同じくらい、相手が何をしてほしいかに気が付いて行動することが大切だと思いました。これからは、家族だけではなくこまっている人を助けたいです。

【小学校3・4年生の部 佳作】

わたしのおじいちゃん

ひばりが丘小学校4年 荒牧 真歩

わたしには、ママの方のおばあちゃんがいます。

おじいちゃんは病気でもう今はいません。おじいちゃんが生きていたとき、病気になってしまいわたしは、ママが会社、休みのときおじいちゃんのお世わをしていました。

おじいちゃんがひとりでトイレに行けないのでいっしょにおじいちゃんの手をささえ、つれていったりしてました。

おじいちゃんは、いつも「ありがとう、手伝ってくれてうれしいよ。」と喋っててくれました。

おじいちゃんのコまっていることを助けてあげることがわたしは、うれしくておじいちゃんの家に行ったときは、いつもおてつだい、体のマッサージとかしてあげていました。人のお世わすることがわたしには、はじめてのことでした。

おじいちゃんのお世わをしたことで、わたしは自分の家のすんでいる、近所のおじいちゃん、おばあちゃんたちとあうたんび、あいさつをして、「おばあちゃん元気ですか、おじいちゃん元気ですか。」とあいさつといっしょに声をかけるようになりました。

これからも、人がこまったりしていたら、自分から声をかけて、自分でおてつだいできることがあればおてつだいをしていこうと思います。

【小学校3・4年生の部 佳作】

ぼくの身近な福祉

立野台小学校4年 大堀 柳

ぼくは、福祉という言葉は知っているけど

「福祉ってどんな意味だろう？」

て思って母に聞きました。そしたら母はこう答えました。

「福祉はね、身体の不自由な人や高れい者のために使われる言葉のように思われがちだけれど、本当の意味は『幸せ』って事なんだよ。」と、教えてくれました。

ぼくの身近な福祉は、ぼくの足の悪い母の事です。ぼくの母は、ぼくが生まれた時から足が悪くてつえをついていました。だから、みんなのお母さんが普通にできる事ができません。例えば、走る事ができなかったり、車がないと遠くへ出かける事ができなかったりします。ぼくは、つえをついてる母が「いつも大変そうだなあ。」とっていました。ぼくは、母がどうしたら楽にらせるかを考えてみました。母が階段を上る時には、ぼくのかたをかしてあげたり、上りやすいように工夫してあげています。また、母は重いものを持つと足が痛くなるから、お買物に行った時にはぼくが荷物をもってあげます。母は足が痛くなってしまくと、全身に疲れがまわってしまい寝たままになってしまいます。だから、あまり歩かなくてもいいように必要な物があれば、ぼくがかわりにもってきてあげます。母はいつも「ありがとう、助かったよ。」と、ニコニコしながら言ってくれました。これからも、母がどんなふうにしたら幸せにらせるか考えていこうと思います。

そしてぼくの周りの身体の不自由な人のために何ができるかも、考えてみました。目が見えない人が電車に乗ったら「おりるはばが広いから気をつけてください。」と、声をかけたり、母のように足が悪い人がいたら席をかわってあげようと思います。また、しょうがいを持った人だけではなくこまっている人がいたら、やさしい気持ちで声をかけられたらいいなあと思います。大きな事ができなくても、ぼくにできる幸せをたくさんみつけていこうと思いました。

【小学校5・6年生の部 佳作】

ヘルプマークについて

相武台東小学校5年 加藤 レイ

目に見えないしょうがい、まわりの人のたすけがひつような人がつけるマークです。

あかいろのフダに、ハートと十字のマークがかいてあります。

ぼくは、できないことやわからいないことがあると、パニックになったりしてしまうことがあったり、もじがかけないので人のたすけがひつようになった時に見せるようにと、市やくしよでおかあさんがぼくがつけるようにもらってきました。ぼくも、見ためではしょうがいがあることがわからないけど、ヘルプマークをつけていることで、しょうがいがあることがわかります。

おだきゅうでんてつでは二千十八年六月から全車りょうのゆうせんせきにヘルプマークステッカーがまどにはられるようになりました。

ヘルプマークをつけている人がいたらおとしよりじゃなくてもけがをしていなくても、せきをゆずってあげてほしいなどおもいます。

ぼくはヘルプマークをつけているけれど、からだかいたかったりぐあいかわるかったりするびょうきやしょうがいじゃないので、ぼくもマークをみたらせきをゆずろうとおもいます。

ほかのてつどうでもヘルプマークのポスターやステッカーがはってあります。

これからは、でんしゃいがいでもポスターやステッカーがはってあるところがふえるかもしれません。

ぼくもヘルプマークをつけているので、たすけてもらうことがあるかもしれないけれど、ヘルプマークをつけてこまっている人がいたらたすけたいとおもいます。

【小学校5・6年生の部 佳作】

自分とのちがい

立野台小学校5年 和田 紗瑛

私たちの周りには、体の不自由な人、小さい子や、おじいさん、おばあさんがいます。私たちは、その人のために何かできるのでしょうか。

一番に私ができることは、声かけです。

「大丈夫ですか。」

など、困っている人がいたら、

「何か手伝いしましょうか。」

などかん単に言えると思います。なので、困っている人がいたらこれからすすんで声をかけてあげようと思います。世の中には、高齢者などのお手伝いをしている人たちがいます。栄養バランスを考えて、ごはんを作る人や、いつも高齢者を見守っている人がいます。その人たちは、いつもあたりまえのように、声をかけてあげています。そのように声かけは、すぐにできることだけどすごく大切なことなのです。

2番目は、自分がその人の気持ちを考えることです。自分で、「これされたらうれしいな。」や、「やってあげたら気持ちいいな。」などその人の事を考えて、助けてあげるだけで、相手も自分も気持ちよくくらしたいと思います。

世の中には、体の不自由な人、小さい子や、おじいさん、おばあさんなどのめんどうを見る仕事があります。私のおじいちゃんは、老人ホームにいます。一生けんめいはたっている人のおかげで今、おじいちゃんは元気にくらし

います。私は、そのお仕事をしている人がすごいな、と思います。その他に赤ちゃんをあずかる仕事をしている人もいます。その人たちは、赤ちゃんを安全にさせるようにしています。でも小さい子なのでいちようお母さんはついていて、でも本を読んであげたり赤ちゃんを笑顔にさせていて、すごいな、と思いました。

私たちの周りには、いろんな人がいます。その人たちのために私たちは何ができるのかを考えてみんなが気持ち良く、くらせるようにしたいです。そのために、働いている人などがいます。私たち子どもでも、やれる事はいっぱいあると思うので、こまっている人を見つけたら、すすんで声をかけてあげるなどをしてあげたいと思います。私は、まだ元気にすごしているけどそれがふつうではない事を理かいして、これからも安全に生活して、こまっている人がいたらたすけてあげようと思います。

【小学校5・6年生の部 佳作】

けがの間で学んだこと

栗原小学校6年 堀 真一郎

二〇一八年夏までぼくは障害をもった人の気持ちを考えたことがありませんでした。ある日、いつものように野球の練習をしていたら、バッティングマシンのボールが薬指に当たり、救急車で運ばれました。開放骨折と分かり、二度と指が治らないかもしれないと言われました。とてもショックで、悲しい気持ちでした。その夜、ぼくは三人部屋の病室で、入院しました。地球の中には、毎日病院にいる人もいます。そう思ったら、一日くらいとても楽と思いました。でも、楽ではありませんでした。毎日病院にいるのは、ぼくにとって、とても無理なことでした。しかし、それを毎日続けている人もいます。その人達も、早く退院したいと思っています。ぼくがいた病院には、さまざまな人がいました。ふつうのけが、大けが、病気になっていた人もいました。中には、二度と治らなそうなけがや病気をもっていた人もいました。

そこで、やっと気がつきました。みんなみんなが平等ではなくて、恵まれている人もいるけど、恵まれていない人もいます。ぼくは、毎日ふつうにくらしているけれど、とても恵まれていると思います。手も足も動くのも、とてもありがたいと思います。

ふだんの生活の中でも、一見変わった行動をする人もいるけれど、やりたいわけで作っているわけではないので、気持ちはしっかりと分かります。障害をもった人を、ばか

にするのはぜったいだめです。障害を持った人も、何かの才能を持っていると思います。

ぼくは、これからいつも元気でいられることをありがたく思いたいです。ぼくはふつうに動けることは恵まれているのだと思います。ぼくは、けがをしてから、四・五ヶ月走れませんでした。とても、きつかったです。走ってぶりかえしたら、指がもっとひどくなると言われたからです。でも、治って最初に走った時は、とても気持ちよかったです。

ぼくは、これから、障害をもつ人の気持ちをもっとよく考え、もっとやさしくしたいです。

【小学校5・6年生の部 佳作】

今、わたしができること

相武台東小学校6年 河治 美和

私は、ダンスを習っています。私が習っているダンスでは、月に1度障害者施設に行き、障害を持っている方と一緒にダンスレッスンをしています。私が行っている障害者施設では、私たちと同じ年れいの子が多く大人から子どもまでいます。私たちがなぜ行っているかという、みんなと一緒にダンスをおどって障害の方を元気にしようということについています。

私が障害者施設に行くと、心が温まることがたくさんあります。

1つは、障害の方からいつもいつも元気をもらいます。私たちが行くと、「久しぶり」「○○ちゃん」「元気だった？」などうれしそうなおをしてくれくれます。それに、私が一番うれしかったことは、顔を見て名前を言ってくれたことです。そのことが今でもあたまからはなれないくらいうれしいです。

もう1つは、いっしょにダンスをおどっていると、みんな笑顔でおどってくれます。その笑顔を見ると次も行きたいな、とかまた一緒にダンスをしたいな、といつも思います。それに、いやなことすべてわすれられます。

私は、前まで、障害者の方のことがあまり分からなかったけれど、障害者施設に行き、障害の方とたくさん交流して、少し障害の方のことが分かったきがします。今、私ができることは、月に1度の障害者施設の交流を大切にし、

ダンスのことばかりではなく、学校や町にいる障害の方の気持ちになって生活していきたいなと思いました。

【小学校5・6年生の部 佳作】

クッキー

立野台小学校6年 宮澤 慶太

ある日ぼくが学校から帰ると机にこんなものが置いてあった。

クッキーだった。さらにふつうのクッキーじゃない。なぜならひまわりの形だった。ぼくは、なにこれ？と思いながら遊びに行くので家を出た。

家へ帰ってきたので気になっていたクッキーのことを母へ聞いてみた。すると、母は答えた。

「あのクッキーは近くにあるグローリーで買ったの。さらにあの店心に障がいがある人が働いているの。」

と言いぼくは、へーと聞き流していたけれど、食べたなら美味しかったのでお母さんにこう聞きました。

「本当にこれ障がいのある人が作ったの！！。」と、失礼に聞いてしまいました。これがこのテーマで書こうと思ったきっかけでした。そして、この作文を書くとなったとき、いい機会だからグローリーに行ってみようと思ったときその日の営業は終了していました。店だけでも見ておこうを思ったので、お店をながめていたらまどが開いて女の人が出て来て、

「なにかほしいのはある？」

と聞いてきたのでいいんですか？と聞いたら、

「特別にいいよ明日から店も休みだから。」

そのおかげでざまりんクッキーを2まい買いもどりました。クッキーは整っていて障がいのある人でもこんなに美しく、

美味しくつくられることを改めて知り差別になることは絶対してはいけないと感じました。

そしてぼくはいつか未来に差別がなくなりだれともいっしょに働けるような未来にしたいと思いました。

すべての人が住みよいくらしになるためには、ぼくは障がいの意しきをなくすことだとぼくは思います。そして、ぼくが自分でずっと心がけていきたいことは、まず障がいの意しきをなくして、同じあつかいをすること、やさしくすること、差別をしないこと、自分でずっと心がけていきたいと思いました。

【中学校の部 佳作】

笑顔で幸せに

相模中学校1年 古木 杏美

私は、笑っている時がとても楽しい。だから、誰かを笑わせることが出来た時や誰かが笑っている時を見ると私はとても楽しくなる。人が幸せになるためには「笑う」ことが大切だと思う。

私は小さい時からよく笑ったり笑わせることが好きだった。楽しかった。特に、元気の無い人や落ち込んでいる人を笑顔にさせることが好きだった。人の笑顔を見ていると、何だか心がホッコリするような気分になり、私も幸せになる。

私が特にそんな気持ちになったときは、おじいちゃんが入院したときと、施設に入ったときのことだ。入院した時は家族の皆が不安な顔をしていて全員の気分が落ち込んでいた。私は皆が落ち込んでいるのはイヤだったのでいつもより明るくふるまいわざとボケたりすると皆笑ってくれて、「ありがとう」と言われたのだ。

私もおじいちゃんのごことはとても不安でしかたなかった。が、「ありがとう」という言葉を言われ、心の不安が消えて幸せなような気持ちになった。

そして、施設に入った時。施設に入るのに時間がかかったため、何か月もおじいちゃんと会えていなかった。私の心は暗かった。

おじいちゃんと久しぶりに会った時、顔色が少し悪くやせていたようだった。その時は悲しくなったような気持ち

になったが、笑顔でいなければおじいちゃんもつらくなる。と思ったので、気持ちを切り替えて元気よくいつものように話しかけた。すると、ニコニコしながらうなずいていた。私にはおじいちゃんが、元気になったような気がしてうれしくなった。

私が施設から帰ろうとした時におばあちゃんが、また私に「ありがとう」という言葉を使った。言われた時はあまり意味が分からずただポカーンとしていた。しかし、帰ってから考えてみるとなぜおばあちゃんがありがとうと言ったのか分かった気がした。たぶんおじいちゃんが笑っていたからだ。元気な姿を見てうれしくなってくれたからだと思う。

このことが分かったときにはとてもうれしくなった。心がじんわりする感じだった。

笑顔は人を幸せにし、自分も幸せになれる不思議な力がある。

ここまで、笑顔と福祉の共通点は「みんなを幸せにする」という点でしょう。でもそれだけではありません。

例えば、身近なことでいうと物を落としてしまった時。落ちたものを拾ってくれた友達が無表情のまま渡してくれた時と、笑顔で渡してくれた時とだと気持ちは違うだろうか。無表情だと素っ気なくて、冷たい。笑顔だと無表情のときよりかは、やさしさを感じるのではないかと思う。

どちらの方が気持ちが幸せと思うのだろうかと考えると、たいていの人は「笑顔」と答えるだろう。

なにを言いたいかという、例え人助けやいい事をして笑顔がないと、助けてもらった人は必ずしも幸せな気持ちになることはなかなか無いということだ。

何事にも「笑顔」は必要だ。幸せになるための「原点」だ。席をゆずる時も、手伝いをするときも、笑顔は大切だ。

「笑顔」を忘れずに私達は生活していけば幸せな気持ちになれるだろう。

またどんなつらいことがあっても、少しでも笑えば少しは気持ちが楽になるだろう。

「笑顔」こそ、みんなを幸せにして、みんなが幸せになれるものだ。

だからこれからも私は、笑うことと、笑わせることを続けていきたいです。

周りの皆が幸せになるために、鏡の前で顔をチェック！家族からおかしく思われるかもしれないが、それもおもしろいではないか。そうやって幸せになればいいんだから。

【中学校の部 佳作】

生きやすい環境を

東中学校2年 空田 羽音

今の時代、自分と少し違う人や変わっている人を白い目で見て距離を置いたり、仲間はずれにする傾向にある気がする。その多くは体が不自由だったり発達障害のある人だろう。

実際に私の身内にADHDという発達障害をもっている人がいる。見た目は普通でこれといった変わりはない。しかし中身は少し変わっている。例えば、質問されたり話しかけられた時に、「あ、あ、え、えーっと」のようになかなか上手く話せず自分の気持ちを伝えることができない事がある。他にも、自分で考えて行動できず、指示がくるまでオロオロしてたり、こだわりが強かったりする。そんな彼だけど一緒にいると、とても面白い。話していても楽しい。なのになぜ周りの人は見た目や行動だけで差別をするのか。

自分自身が絶対に差別をしてないとは言いがたい。でも人がやっているのを見ていると「そこまでしなくても。」と思う事が多い。どうして差別をするのか。自分の経験から考えてみると、質問に対してなかなか答えてくれず、最初の方は我慢できるがそれがずっと続くとイライラしてしまう。もしかしたら差別をする人もそういう心境なのかもしれない。ADHDの彼は差別はなかったが友達が少なかった。話しかけてくれる人もいたそうだがとまどってしまい返答できず、距離を置かれてしまったらしい。差別をし

ている人は、もしかしたら私と同じような感情が生まれて、それが行動や態度に出ているのではないかと思う。

どうしたら差別もなくなり障がいの方々が生きやすくなるのか。一番は交流をして、その人がどういう人かを知る事だと思う。昔は障がいの方へ差別的な目だったが、実際に彼がADHDだと発覚してから、見る目が変わった。見た目だけでは分からない事の方が多い。だからこそ交流をしてその人の性格やどのような症状なのかを知ることが一番の方法だと思う。後は、気配りや手助けなどの基本的なことを、自分で少し意識するだけでも変わるのではないか。みんな違って当たり前という事をしっかりと理解することも大切だと思う。

最後に、私も絶対に差別をしていないとはいえない。どこかでやっていると思う。後、人がやっているのを見て、やりすぎだと思うこともあるけれど、止めることが出来ない。まずは自分が変わらなければ何も変わらない。一人一人の意識や気遣いで、ほんの少しかもしれないが何かが変わり、障がいの方々もほんの少し生きやすくなるかもしれない。障がいだからといって差別されるのではなく誰もが平等に、障がいであっても誰であっても生きやすい環境の世の中になることを、私は願っている。

【中学校の部 佳作】

心に寄りそって

東中学校2年 山崎 結芽

私の祖父は「心筋こうそく」で祖母と2人での旅行帰りに意識を失い運転していた車のかべにぶつけ病院にはこばれました。祖父は延命治療はしないと書いていました。その理由はいくつかありますが一つは「障害をもち、めいわくをかける生活を送りたくない」からだそうです。

私は「家族だし、生きてくれれば障害なんて関係ないし、めいわくだなんて誰も思わない」と思いました。しかし実際今まで生活してきた身内では無い障害をもった方が困っていきそうな時「何か手伝いますよ！」と言えたことがあるのか考えてみました。十三年間生きていて言えたのはほんの数回でした。そしてその聞き方は「大丈夫ですか？」と声をかけていました。私は誰かに「大丈夫？」と聞かれると、困っていても「大丈夫！」と答えることが多いです。

「大丈夫？」は相手の返答をせよめて、助けてほしい事を言えなくしてしまっているのかなと思いました。また、「障害だとめいわくをかける」と思うのは、社会が障害をもっている人にとって、大変で住みにくいとわかっているからなのかなと思いました。例えば足に不自由のある方で車イスを使っていると段差があり大変とほとんどの人が思いますよね？しかし、私達はその「大変」だとわかっていることを見て見ぬふりをしてしまっているんだと思います。段差だけではありませんが、たくさんある「大変」を全く無くすのは難しいと思います。ですが私達が「大変そう」

だと思うことに「人助け」では無く「あたりまえ」として手を差し伸べることができたなら障害の有無をこえて笑顔になれる人がふえるのかなと思います。声をかけることはすごくきんちょうするけどそのかけた声一つで笑顔になれるのなら、私はがんばりたいと思います。

私は祖父の出来事があり、今後の祖父に障害が残ってもちゃんと祖父の気持ちを考えてあげたいと思いました。祖父だけで無く誰かが困っていたらあたり前のように声をかけ手を差し伸べたいです。今回のことで思ったことを忘れずに周りを見たいと思いました。そう思う人が増えて、たくさんの方が笑顔の社会になるといいなと思います。そして相手に寄りそうことが「特別」では無く「あたりまえ」になってほしいです。

【中学校の部 佳作】

平等の大切さ

南中学校2年 宮松 菜南

私は去年学校の福祉学習で高齢者疑似体験をしました。高齢者の方々が普段どのようにして暮らしているのかなどを体験を通して知ることができたし、どうやって接すれば良いのかということも学べて、とても良い経験ができたと思います。それ以来私は福祉について興味を持ち、出掛けた時、福祉に関するものに注目するようになりました。

注目しているうちに、気になるものを見つけました。それは「手話フォン」というものです。羽田空港で見かけてから、ずっと気になっていたので、ネットで調べてみることにしました。すると日本財団のホームページにたくさん説明がのっていました。ホームページによると、手話フォンは手話で話す利用者と、声で応える通話先とを、手話通訳オペレーターが翻訳することでつなぐシステムとなっているそうです。このシステムは「電話リレーサービス」として日本財団が二〇一三年から行っています。このことを知って、私は手話と言葉で、遠くにいる人とでも会話ができる機械があるのはすごいなと思いました。電話リレーサービスは、世界の二十ヶ国以上で公的なサービスとして普及しているのですが、日本ではまだそのようなサービスが制度としては存在していないようです。また、今までに民間団体でそれに類する試みがあったそうですが、利用者が使用する際、料金が高額になってしまうため利用者が伸びなかったといいます。その点から、今回私が見かけた羽田空港に設置されている手話フォンは、午前八時から午後九

時まで料金無料、事前登録も不要で誰もが簡単に利用することができるようになってきているそうです。私は、耳の不自由な方でも平等に電話をできるのはすばらしいことだなどと思いました。手話フォンはマスコミなどで多く取り上げられたり、数々の委員会で議論されてはいますが、一般的にはまだまだ認識されていないのが現状なのだそうです。実際私が見かけた時も誰かが利用している様子はなく、あまり注目されていませんでした。日本のバリアフリー化にはとても良いものだと思うので、手話フォンの存在をこれから多くの人に知ってってもらいたいです。すでに全国の主要空港をはじめ、国内六ヶ所に手話フォンが設置されているようなので、できれば、これからもっと手話フォンが増えていって、人々の日常の中に手話フォンがある状態になったら、日本はもっと平等になるんじゃないかなと思います。

今回見つけたのは、聴覚障がい者や音声でのコミュニケーションに困難がある方でも平等に電話ができる機械だったけど、私はこういった全ての人々に優しいものがこれからもたくさん増えていってくれるといいなと思います。でも、機械に頼るだけじゃなくて、私たち自身が障がい者の方や高齢者の方に思いやりを持って接することもとても大切だと思います。思いやりを持った人が増えて、日本に限らず世界に幸せな人が増えていってほしいです。

去年福祉学習をしていなかったら、たぶん今よりもこういったものに注目することは無かったと思います。だから、本当に良い経験ができたなと思いました。これからも、たくさんバリアフリーに関するものを見つけていこうと思います。

【標語の部 最優秀賞】

我なりに おしゃれして デイサービスの車待つ

相模が丘在住 加藤 茂子

【標語の部 優秀賞】

小さな手 あなたの気持ちで 無限大

南中学校 1年 石川 蓮

ひとし 人知れず こかげ ほほえ 木陰に微笑む かき さと ざま 花卉の郷(座間) ろうにやくやす 老若寧く かた いこ 語りて憩う

相模が丘在住 川原 千代子

【標語の部 佳作】

スマホより こまっている人 ゆうせんだ！！

座間小学校 3年 白崎 瑛斗

さしのべて しっかり つかむよ あなたの手

相模が丘小学校 6年 酒井 梨衣奈

気づきあおう 声に出さない SOS

南中学校 1年 矢野 愛実

笑顔の輪 そこに寄り添う 和の心

立野台在住 中村 史子

